



原田牧場 Note

page 12

大阪弁について。北海道に来て最初の頃、相手が自虐で言っていると思った話に、アホやなあとツッコミで返したら、エッ！と言う顔をされ、大変やったね、となぐさめるのがこちらの常識と気づかされました。茶化されたと思われないう、不用意にこちらからは突っ込まない。私の中で最初のルールになりました。関西より距離がある人付き合い、物足りなさは感じますが、平和です。ツッコミは少し毒っ気のあるところに面白さがあるけど、相手がその言葉にドキッ！とするようなら言わない方がいいし、私も言わないので、北海道で傷つくチャンスは全くなし。たまに大阪へ帰ると刺激的なツッコミを受けて、笑いとともにチクチクも。体感で違いを感じるようになりました。大阪のような会話のやりとりは難しい北海道ですが、自虐を披露してそれに自分でつつこむ漫談形式で、大阪の会話の雰囲気を知ってもらうことはでき、一人でしゃべっているような状況にはなりますが…時々やっています。北海道の方にも安心して笑ってもらえます。

大阪弁を使い分ける。敬語になると大阪弁が引っ込むので、普段は敬語でフラットに話し、ここぞという時、例えば…相手と仲良くなりたい時、本音を聞きたい時、状況を和やかにしたい時、生意気にも偉いさんに進言する時に、部分的に大阪弁で話します。やはりお国言葉は感情が乗り、想いが伝わる気がします。大阪弁特有の距離の近さも、部分使いでいい塩梅になります。牧場のスタッフさんにも、仕事の際はフラットに、仕事以外の雑談は大阪弁にする、オンとオフの使い分けも意識しています。時に、シリアスな注意をする場面では、あえて大阪弁で柔らかくすることもあります。イントネーションが穏やかなところを生かします。

大阪のおばちゃん力を活用する。我が家には牧場スタッフ専用のアパートがあり、一階のミーティングスペースでは季節行事のたびに食事会を開いています。スタッフの募集は道外の方にしたいと思い、移住してもらうには、安心して暮らせる快適な住宅が必要だと家族で話し合っ建てました。現在は単身の女性のみなので、困り事や仕事上の悩みを話せる雰囲気づくりに重きを置いています。家族も友達もない場所へ来て、へこむことや疲れ果てることもあるでしょうに、それを言わない、我慢するのが普通、という子が増えている気がします。北海道では馴れ馴れしすぎるかな、と思ってきた大阪弁を大活用→「あんた、大丈夫か？なんかあったらすぐいいや、おばちゃん聞いたるから」ってな具合で若い子にはコテコテでいきます。最初はびっくりしたような顔をしますが、慣れてくると「大丈夫です…」と笑顔を見せてくれるようになります。ちょっと呆れられてる気もしますが。私も若い頃、大阪のおばちゃん（友達のお母さんたち）に助けられた経験があり、その時を思い出してグイグイいきます。（本当は人見知りでそんなタイプではないのですが、大阪のおばちゃんキャラで行くのです）私の母が亡くなった時、同級生のお母さんたちが家に来て声をかけてくれました。なんかあったら電話してきいや、と今も言ってくれます。実際、祖母の介護のこともおばちゃん達に相談し良きアドバイスをもらいました。アパートの子達についても、なんかあった時にふと頭に浮かぶおせっかいおばちゃんになれば！と思います。大阪のおばちゃんは最強！私もそうありたい。

牛さんは大阪弁をどう思っているのか。大阪のゆったりしたイントネーションは気に入ってる様子です。言葉はわからないとしても、トーンや声色は敏感に察していると思います。例えば、猫なで声で言った時は、こちらの戦略がバレているのか？思った風に動いてくれない。蹴ってくるのをたしなめようと、お姉さんぽく怒ったら、再度小さく蹴ったけど、お母さんぽく怒った時は蹴るのをやめました。お母さんの、も～しゃ～ないなあ～あんたは！感＝懐の大きさ、安心感みたいなものは確実に伝わっている様です。

言葉は受け取る側がどう判断するか？によりけりで、こちらはコントロールしづらい面もありますが、トーン、声色は自分のもの、私はこうですよ、と真の気持ちに乗せて届けることができる。動物的伝達法を人間界でも活用してみるのも面白いですね。

筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当

